



汗して語ること

野崎洋光さんを訪ねて（分とく山 総料理長）

東日本大震災から1年が経ちました。災害は、着飾った人間の生を丸裸にします。あって当たり前の近代的なくらしが崩壊したとたん、煌びやかな装飾品など何の役にも立たなくなるのだと痛感しました。今、被災地を支えているのは、家族の絆、地域のつながり、人のあたたかさだと思います。そして、被災者の命を明日につなぐのは、汚水処理をはじめとする、普段意識されない縁の下の力持ちたちです。筆者は、今回の震災を機に、私たちが真に守るべき“大切なものはくらしの核心”をもう一度見つめ直したいと考えました。そして、そこに水や下水道がどのように関わっているのかを、様々なくらしの場面や人、コミュニティ等を訪ね歩く中で、探っていきたいと思います。

第1回の執筆に当たり、筆者は南麻布の和食の名店「分とく山」を訪ねました。総料理長の野崎洋光さんにお会いするためです。野崎さんの存在は確か料理番組で知ったのですが、その時に深く印象に残ったのが「食の原点は家庭料理にあり」という言葉です。大衆の価値観が軽薄になる中、料理を通して「ものの本質や道理を見失ってはいけない」と警鐘を鳴らす姿に共感を覚えました。

福島県出身の野崎さんは、東北人らしくとても実直な方です。筆者がお聞きしたかった「食の本源とそれに関わる水への想い」を、ご自身が「生きる」という行為によって紡いだ言葉で、丁寧に、しかし熱く語ってくれました。以下、野崎さんの言葉です。

魚を煮る時は必ず沸騰させてから。

炊飯ははじめチョロチョロ中パッパ。

鰯の臭みを取るには生姜を入れる。

これ、「全部ウソですよ」と私は言っています。全部人の言葉を借りているだけで、本当のことを伝えていません。

最近何かにつけデジタル化、情報化と騒がれます。私から言わせれば、情報化とは人を無知にすることです。現に、汗をかいて言葉を発している人が減っているではありませんか。代わりに、経験のない人がネットかなにかで拾った言葉を操って、あたかも分かったような批判を繰り返すばかり。ずいぶんと軽佻浮薄な世の中になってしましました。

水に関しても嘘が多いですね。例えば「水道水では

良い出汁がとれない」と吹聴する人がいますが、そんなことはありません。「関西は軟水だから出汁がとりやすくて、関東は硬水だから味が劣る」。これも出鱈目で、実際はほとんど違いなどなくて、むしろ昆布出汁は硬水のほうがとれるくらいです。

JTの塩もしばしば悪者扱いされます。理由は、モンゴルや沖縄の塩のほうがミネラルが豊富だからだそうです。でもよく考えてみてください。塩に含まれるミネラルなんてたかが知れています。ミネラルを摂りたければ塩を選ぶのではなく、サツマイモを食べればいいだけの話です。

借り物の言葉があふれると、物事の本質や価値は見え難くなります。さきほど触れた煮魚の話だってそうです。これは魚の身を熱湯に入れることで瞬時に表面を固めて旨みを封じ込める教えですが、でもそれは同時に、身に味を染み込ませないことでもあります。つまり、食材などによって柔軟であるべき調理技術的一面に過ぎないのに、あたかも万能な技術であるかのように流布しているのです。

学者の言葉もあてになりません。先日も「関西の味付けが薄口で、東北が濃いのはなぜか」という問い合わせに、公家文化と武家文化の違いだと述べた学者がいました。昨年、東北があれだけの震災を経験したというのに、何を学んだのでしょうか。東北はその歴史を振り返れば、凶作と災害の連続でした。そのため食料の保存が命を守る鉄則だったのです。よく知られているのが塩蔵で、塩漬けされた食材は味がどうしても濃くなります。私は福島県古殿町出身ですが、子供の頃は蔵の中にいつも3年分くらいの食料を備蓄していました。今のように石油文化になる前は、そうやって東北



の農家は厳しい環境で孤立しながらも生き抜いてきたのです。つまり、生きることに皆が責任を持っていました。

今はなんでも便利になりすぎて、責任がぼやけてしまっています。これは非常に危ういことです。生きることの責任は最終的に私たち自身が負わなければなりませんが、そのためにはもっと汗をかき、物事を自らの経験で判断できるようにならなければいけません。

20年後に危惧される食糧危機問題にしたって、今の政治はまるで頼りになりません。福島の山あいの田んぼを見て、ネクタイを締めた政治家の先生たちはこう言いました。「点々とする田んぼをまとめて大きくすればいい」と。しかし冗談ではありません。米作りの基本は天候との相談です。日当たりの良いところがあれば、悪いところもあって、農家は適した場所を選んで作付けをしているのです。昨今 TPP が騒がれていますが、その前に政治家の皆さんには背広を脱いで田んぼに来てもらいたいと思います。

水に対する責任もぼやけてしまっていますね。昔は井戸などの水源を地域の住民がみんなで責任を持って管理していました。トイレも水洗化される前はボットン便所で、糞尿を畑に撒いたように、自分のものは自分で処分していました。

今はレバーを捻るだけで簡単に水に流れてしまう便利さはありますが、だからこそ、責任が分からなくなっています。排泄物を流すということは、流した先に必ず処理する誰かがいるということですが、それが見えていません。汚れをそのまま海にたれ流したらどうなるかなんていうのは、誰でも想像できるはずですが、そういう想像すらしない世の中になっています。

今、政府は消費税の議論を盛んにしていますが、私はむしろ「生きることへの国民の負担をどうするか」の視点で語り合うべきではないかと思っています。生きるということは、ものの金額が高いか安いかで済む話ではないからです。水道料金にしろ、下水道料金にしろ、自分たちの責任をないがしろにして「安いからいい」というのではだめです。

中国を見てください。近年、日本の山林を買いつぶっているのは、いずれ自国の水が足りなくなることを予測しているからです。一方、日本国民の多くは目覚めていませんね。

日本は江戸時代に玉川上水を整備したすごい技術があるのに、専門家以外、誰もそれに目を向けようとしません。八ツ場ダムにしても出てくる話題はお金のことだけ。本来ならば、未来を見据えて生きることに立脚した議論でなければならないはずです。

これから日本を背負うのは若い人たちですから、ものの価値を彼らに分かりやすく伝えることも考えなければなりません。実は私、最近「ポッキー野崎」と



呼ばれています（笑）。講演の時などに、ポッキーを使って農業の価値を伝えているからです。

例えばお茶碗1杯分のお米（生米で約65g、炊いて約150g）があるとします。それを国民はポッキー6本分（約4円×6本）のお金を払って食べていますが、実際に農家が手にできるお金は僅かポッキー2本分です。こんなのが今どき子供のおやつにもなりませんよね。「ポッキー2本で農業をしなさいって、少し馬鹿にしているませんか？」と投げかけると、多くの人が農業の置かれている現状に気付いてくれます。

一方、下水道の価値を見直してもらうには、「あなた、ウンチをした後に自分で片付けてみてください」と言ったらいいのではないかと思います。あるいは「人のウンチをあなたならいくらで片付けますか？」と聞いてみてはどうでしょうか。

暮らしのインフラというと、皆さんだいたい水道や電気、ガスにまず関心が向かいます。つまり、太陽ばかりを気にしています。けれど、光合成は明反応と暗反応で成り立つように、世の中には必ず陰と陽があることを意識しなければいけません。水道を使えば、どうしたって後始末が必要になるわけです。そこに気付いてもらえるかどうかが大切だと思います。

今、若者に向けて言いたいのは、なんでも原点を知る努力をしなさいということです。命がどうやって生まれて育まれるのか、水はどこから来てどこに行くのか。そういう基本的なことを学んでほしいと思います。

文明の発展には必ず表と裏があります。水を便利に使いたいという願いが表なら、必ずそれを処理する裏側にも目を向けなければならないのです。そこに自分たちがどう責任を持つのか、若い頃から考えてほしいと思います。

「生きる作業」をもう一度考え方ですが、今後の水事業や教育に最も大切な視点ではないでしょうか。

【プロフィール】野崎洋光（のざき・ひろみつ）。昭和28年、福島県石川郡古殿町出身。昭和64年、「分とく山」を開店。平成16年にアテネ五輪日本代表野球チームの総料理長に就任し脚光を浴びた。「和食の設計図」（講談社）など著書多数。

（筆者：中山 憲）